

ヘーゲルの言語論

伊坂青司

はじめに

ヘーゲルの言語論は、哲学的な言語理論の一層の深化のためにどのような貢献をなし得るだろうか。

ヘーゲルの「言語」に関する論述を追ってゆくと、大きく言つて二つの系譜があることに気づかされる。さしあたって、その二つの系譜を大胆に特徴づけるとすれば、ひとつは、主観と事物との関係において論じられる言語論⁽¹⁾であり、もうひとつは、社会的・公共的な場において論じられる言語論⁽²⁾である。両者は、一見全く異なつた次元に属しているように見えながら、実は相互に補完しあつてヘーゲルの言語論を形造つていると思われる。そこでこの小論においては、とりあえず、次元の違いに応じてそれぞれの系譜の言語論を考察し、そして更に、この両者の相関関係を明らかにすることによって、ヘーゲルの言語論をトータルに把握するひとつの手掛りを得たいと思う⁽³⁾。

I

主観と事物との関係において言語を論じる際には、ヘーゲルは、一貫して言語を「記憶 (Gedächtnis)」と結びつけ、「記憶の所産」

として捉えている。「言語の根源」⁽⁴⁾と言われる「ムネモジネー」(記憶)は、ヘーゲルの哲学体系において、「直観」から「思惟」への媒介的役割をはたす「表象 (Vorstellung)」のうちに位置づけられている。ヘーゲルによれば、主観は「表象」において既に「直観」のもつ直接性を否定し、事物の「直接的定在」から離脱している。つまり、「表象」においては対象的事物の直接性は消滅しており、事物は今や主観に内なるものへと転換されて、「心像 (Bild)」や「觀念 (Gedanke)」として保存されている。「記憶」とはこうして、「直観」から「表象」への「自己内化 (Erinnerung-in-sich)」を媒介として、感性的な諸規定を洗い落としつつ主観のうちに沈澱したものとて内面的なものである。そして言語は、このような「記憶」の所産として、内面的なものが「外面性の形態」を得たものに他ならない。「そのように内面的である外面的なものは、ただ分節化された音、つまり語だけである」⁽⁵⁾。それでは、内面的なものはどのようにして「外面性の形態」を得ることができるのであろうか。

ヘーゲルによれば、「表象」において主観は、直観において与えられていた事物の「個別性の紐帯から解放され」、事物を、その具体的諸規定については消去して、「抽象的なもの」としている。こうして、主観のうちにおいて「抽象的なものが、それだけで (für sich) 存在するものとして表象されることになる」⁽⁶⁾。「表象」は、「心像」から「觀念」へと抽象的なものになればなるほど、対象的事物から離れてゆき、自立的なものとしてそれだけで存在するものとなるのである。こうして表象は、物事の感性的諸規定を捨象した抽象的なものとして、多様な規定をもった対象的事物のうちから普遍的なものを抽出しているのだと言えよう。このように抽出された普遍的な

ものは、既にもとの事物そのものではなくて、主観的作用によって生み出された、事物とは何か別のもの (etwas anderes) なのである。

このような主観に内なるものが外に現わされるとすれば、それはもとの事物とは全く異なった何ものかによってでなければならぬ。ヘーゲルはこうして、普遍的な表象を表わすものとして「言語記号 (Wortzeichen)」を考えているのである。言語記号は例えば「音 (Ton)」であるが、表象が表現されるために、「音」という感性的素材が記号として用いられる。確かに音声そのものは、それだけでは普遍的な表象に対して偶然的で、無意味なものにすぎないが、主観に内なるものと結合されると、「語 (Wort)」となつて、「觀念によつて生命を与えられた定在」^⑧として有意義なものとなる。こうして、いまだ内面的でしかなかったものも、言語記号と結びつくことによって「外面性の形態」を得ることができるといふわけである。「音の分節によつていろいろな規定をもつ心像だけではなく、抽象的な表象も又表わされる」^⑨。

事物を内面化し抽象化することは、以上見たように、必然的に言語を必要なものとして生み出さざるを得ない。そして、このように生み出される言語は、それ自体、抽象的・普遍的なものを指示しているのだと言えよう^⑩。既に見たように、表象は事物から普遍的なものを抽出したが、言語は、このような表象と結びつくことによって、事物の多様な諸規定のうちから抽象的・普遍的なものを取り出し、指示するのである。主観は、対象的事物とは全く別な或るものによつて、対象的事物を統握し、それを我が物とすることができると言えよう^⑪。

してみれば、言語には、具体的な対象的事物との結合においては恣意的^⑫偶然的でありながら、同時に、抽象的なレヴェルで事物を指示しているという両側面があるのだと言わなければならない。確かに言語記号は、個々の事物に対して恣意的で偶然的であろう。しかしそれが、何物も指示しない、単なる音声や文字の結合としてしか用いられないとすれば、それは全く無意味なものではない。言語記号は、事物のもつ感性的諸規定を抹殺し、それらから自立することによつて、むしろ、事物の普遍的規定を指示することができ。言語記号のこのような機能によつて、事物は記号化された在り方で主観にとつてあることになる。してみれば、言語記号と事物との結合の恣意性は、言語記号のもつ事物の感性的諸規定からの自立性に基づいているということができようであらう。

言語記号のもつこのような性質から、我々は言語が物象として立ち現われる事態を理解することができよう。ヘーゲルの言う「記憶」は、既にして高度に抽象化された表象として、言語と分ちがたく結びついている。「記憶」においては、普遍的な表象とそれを指示する言語記号 (名前 (Name)) が、「普遍的^⑬持続的な結合」^⑭を得ており、直接的な事物の介在を必要とはしなくなっている。例えば、ヘーゲルのあげている例に従えば、「ライオン (Löwe)」という言語記号^⑮名前は、個々のライオンについての実像や心像を必要としないで、それだけで妥当性をもっている。つまり「名前は、物象 (Sache) として妥当する」^⑯のである。従つて言語は、実在しないものを表わしたり、既に事物から解放された表象と自由に結合されて、言語そのものがあたかも実在的であるかのような物象となつて立ち現われることも生じ得るのである。このように言語は、事

物の記号化という手続きをその都度とらなくても、それが持続的に結合している記憶の外化されたものとして、それだけで普遍的な妥当性をもち得るわけである。このような意味で、ヘーゲルは、記憶を「言語の根源」としたのである。

II

これまで我々は、ヘーゲルの言語論のひとつの系譜をみてきたが、この言語論においては、社会性・公共性の領野でとりかわされる言語については本格的な考察の対象とはなっていない。考えてみるに我々は、言葉を発する場合、公共的な言語体系の網目の中に編み込まれた言語を用いている。そして又我々は、ひとつの言語共同体に属し、それ固有の言語的枠組をもって事物を表わし、事柄を語っている。そこで今度は、もうひとつの系譜をなすヘーゲルの言語論、すなわち社会的・公共的な場できわめられる言語について考察することしよう。

前章で見たように、言語は、事物の内面化を媒介とした外面的なものであったが、そこには既に、言語が単に「この私」という個々の主観にのみ帰属するものではなくて、他の主観に対するものでもあることが含意されている。ヘーゲルは、言語のもつ対他性について次のように述べている。「言葉は、純粹な自己の自己としての定在である。言葉において、自分だけで、(für sich)存在する、自己意識の個性、そのものが現存のうちに現われ出て、従ってこの個性は対他的(für andere)である。この純粹な自我としての自我は、それ以外にはそこに(das)あることはない」¹³⁾。みられるように言語は、個別的に存在する自我が、それによって自分を現に「そこにあ

る」ようにするものであり、自我は、言葉を発することにおいて他者に対してあるものとなる。ヘーゲルによれば、言語以外の表現様式、例えば「振舞い」とか「表情」によつては、自我は不完全にか他者に対して現われない¹⁴⁾。言葉だけが、他者に対する十全な表現であり得ると言うのである。

してみると、個別的な自我は、言葉を発すること以外に、他者に対して完全な形で現に「そこにある」ことはないと言えよう。すなわち、言葉を発するかぎりにおいて、自我は他者に対する「定在」を得て、他者によって認められている。自我は、このように言葉を発する行為によって対他的に承認され、語ることをその社会的通用性の力としている点で、語る主体＝発話主体と言うことができる。

ところで、ヘーゲルのこのような言葉に対する過大とも思われる評価は、どうして出てくるのであろうか。我々は、ヘーゲルがこのような言葉を一般論としてではなく、前近代と対比された近代に特有のものとして論じているのだということに注意しなければならぬだろう。確かに、言語は一般に、自我を他者にとつてあるものにするのだと言われ得よう。しかし、言葉を相互にとりかわす主体が、「自分だけで存在する自己意識」という近代的な自我であれば、緊密な社会的紐帯を喪失した状況のなかで、言葉こそが、個々の主体を結合する不可欠の手段＝媒介として、特別の意義を帯びることになる。ヘーゲルはこのような事情をふまえて、前近代の言葉と対比的に、「言葉はここにおいて、それ固有の意味において登場する」のであり、「言葉がまさに言葉として通用する(gelten)」¹⁵⁾のだと述べるのである。何事かが遂行されなければならないとすれば、それは「言葉を発するという力(Kraft des Sprechens)」¹⁶⁾によつ

て可能なものであり、そこに言葉のもつ固有の力が鮮明に現われているのである。

ヘーゲルは、このような近代において鮮明になった言語固有の機能を、「疎外 (Entfremdung)」とアナロジカルに論じている。ヘーゲルは「疎外」について、例えば次のように述べている。「自己意識は、それが自分自身を疎外するかぎりにおいてのみひとかどのもの (etwas) であり、実在性をもつ。そうすることによって、自己意識は自分を普遍的なものとして立てているのであり、そして自己意識のこのような普遍性が、自己意識の通用 (Gebrauch) であり現実性なのである」¹⁰⁾。ここで言われている「自分自身を疎外する」とは、自己意識は個別的自我が、人々の間で認められ通用するように、 \wedge この私 \vee の個別性を普遍的公共性なものにすることを意味している。この「自分自身を疎外する」を「言葉を発する」と読み換えれば、今問題になっている言語固有の機能が浮かび上がってくるだろう。すなわち自己意識は、言葉を発するかぎりにおいてのみ公共の場で「実在性 (Realität)」をもつのであり、発せられた言葉によって公共化されることの中に、自己意識は己れの「現実性」をもつのである。

このように、自己意識の疎外の運動をふまえて考えれば、言語のもつ固有の機能に関する次の叙述も、比較的容易に理解できよう。

「自我はこの自我であるが、普遍的な自我でもある。自我が現われ出ることは、同時にそのまま自我の外化 (Entäußerung) と消滅 (Verschwinden) であり、そしてそのことによって、自我がその普遍性において持続することである。それは一種の伝播であり、そこにおいて自我は、自分が現にそこで対している人々との統一へその

まま移行して、普遍的な自己意識となっている」¹¹⁾。ここでは、個別的な「この自我」が、言葉を発することによって「普遍的な自我」になることが述べられているが、このことをもう少し詳しく見ておこう。

「この自我」の発した言葉は、確かに音声としては即座に「響きやむ (verhallen)」が、他者によって聴き取られ、了解された (vernommen) ものとしては持続的なものとなっている。発せられた言葉は、人々の間に伝播してゆき、そうすることによって既に「この自我」のものではなくて、公共性を帯びたものに転じているのである。従って、「この自我」は、言葉を発する行為において、「この自我」とどまるのではなくて、独我論的な \wedge この私 \vee という私秘性が消滅して、公共の場で了解された自我となる。「自我がその普遍性において持続する」とは、自我が言葉を媒介として、公共性の領野のうちに位置づけられ、保持されることを意味している。こうして「普遍的な自己意識」とは、その発話行為において私秘性を脱し、複数の主体相互の間で了解されるに至った自我のことに他ならない。

我々はこれまで、言語の社会性公共性について、個別的な発話主体の言語行為の側から考察してきたが、ここで視点を言語共同体に転じてみよう。確かに、個々の語る主体の言葉が他者に了解可能であるためには、彼らに共通の全体的な言語体系が前提になっていなければならないだろう。ヘーゲルによれば、言語行為の主体を相互に「連結する (zusammenschließen)」「媒体 (Mitte)」は、「精神 (Geist)」なのであるが、この「媒体」は、我々が常識的に考えるような \wedge 伝達の道具 \vee といったものではなくて、言語行為者

という「各項の間に現われる精神的全体」なのである。そしてこの「精神的全体」は、「各項へと分かれたれ、その各項を全体に触れさせることによって始めて、全体の原理を身につけた形で生み出す」のである。してみると、言葉を語る行為は、ひとつの言語共同体において、既にして全体的な言語体系の枠組によって原理的に規制されているのだと言えよう。こうしてヘーゲルは又、言語を「精神の定在」⁴⁰としても説明するのである。

しかし我々は、ヘーゲルが次のように述べていることにも注目しなければならない。「精神は媒体であるが、それは各項を前提としており、その定在によって生み出されるのである」⁴¹。してみると、全体的な言語体系が個々の言語行為者の前提となっていると同時に、言語行為者も又、言語体系の前提になっているのだと言わなければならない。確かに、個々の言語行為は、全体的な言語体系に根ざし、それを前提にしてこそ公共的なものとして通用するものとなる。しかしこのことは、言語体系が個々の言語行為から超越して、その外部に自存していることを意味しない。むしろヘーゲルは「精神的全体」が現実的なものとなるためには、個々の語る主体の言語行為を俟たなければならないことを述べているのである。してみると、言語行為と言語体系とは、相互に前提しあうて言語現象全体を構成しているのだと言えよう。言語を「自己の定在」とするが「精神の定在」とするかは、実はひとつのことを別の視点から見ることによって生ずる相違であって、両者は、相互に他を前提としながら循環しているのだと言わなければならない。語られた言葉は、全体的な言語体系を活性化しながら公共的・普遍的なものとして通用し、言語体系は、個々の言語行為に受肉し、それを介してはじめて

現実的なものとなるのである。

III

ところで、個人の発した言葉が他者によって了解され伝播するといつても、そのことによって言葉が、個人の意図と全く違ったものに変質したり、逆に当の発話者に対抗して現われたりすることがある。又、人は建前と本音を使い分けることができるし、他人を欺瞞するためにみせかけだけの言葉を発することもできる。してみれば△この私√は、言葉によってそのまま公共的になるとは限らないし、△この私√と発せられた言葉の公共性≡普遍性とは乖離するといふ事態も生じ得るのだと言わなければならない。このことを我々はどうか考えたらいのであろうか。この問題を解明するために、我々は、前章でみた言語のもつ公共性を、第一章で考察しておいた言語の機能と関連させて考えてみなければならない。

ヘーゲルは、発話者の内面的意図が、言葉として発せられることによって、他者から変様を蒙る事態について、次のように述べている。言葉を発することにおいて「個人は、自分自身において自分を維持・所有せず、内なるものを完全に自分の外へ出てゆかせ、他者に委ねる」のであり、このようにして「内なるもの」は「変転の場に委ねられる」ことになる⁴²。個人の内なるものは、言葉として他者に向って言い表わされることによって、もはや△この私√のものではなくて、言葉を聴取した他者それぞれの個人的関心の脈絡のうちに取り込まれるわけである。してみれば、言葉において個別的な自我が、公共の場でそのまま普遍的なものとしても保持されるということは、必ずしも言えないことになるであらう。

既に第一章で考察されたように、言語は、事物の直接的定在から自由になった表象が外化され表現されたものとして、個々の事物や事柄とは異なる普遍的なものになり、個々の主観の枠内には閉じ込められない客観的なものになっていた。間主観的な妥当性をもって通用するという言語の機能は、前章でみたような近代の言語現象において、最も鮮明になるであろう。なぜなら、とりわけて近代的な主体は、言語行為において社会的な通用性を獲得するからである。個々の主体の社会的通用性を支えているのは、複数の主体の間で相互に交換し共有しあえる客観的な形象としての言語である。言語は、個々の事物や個人的体験から解放されたものとして普遍的な妥当性を有しており、個々の語る主体は、このような言語を語ることによって、自らを公共性の領野へと登場させることができる。この場合、言葉は、発話者の主観的な関心や意図に裏うちされたものとして発せられると同時に、他者の個人的な関心のうちに取り込まれながらも、なおそれ自体、同じ言葉として、自立的に、諸個人の間を流通しているのである。

「この自我」は、発せられたかぎりにおける言葉によって、確かに公共性の領野へ移行し、普遍的なものへと媒介される。しかしこのことは、必ずしも発話者の「この私」が完全に公共化されることを意味するものではないであろう。もし、発せられた言葉が、発話者の内面を全て他者に対して表現するのだとすれば、言葉によって他人を欺くことも起こり得ないし、又建前としての言葉もあり得ないことになろう。語る主体は、その発したかぎりにおける言葉において公共の場で通用するのであり、語り出されない「この私」は、発せられた言葉の公共性≡普遍性と乖離しながら、私的な領域

として保存されているのである。こうして言葉は、語る主体がそれによって公共の場で相互主体的に通用するようになり得るものであると同時に、まさにそれ故に、発話者によって巧みに利用され得るものともなるのである。

ヘーゲルは、このような言葉の機能をまことに見事に描き出している。その代表的な例が「へつらいの言葉」(Sprache der Schmeichelei)と言われているものである。宮廷貴族(「高貴な意識」)は、公権力に対して「名前」を呼びかけ、名指された権力は「君主(Monarch)」として自他ともに認めるところとなる。ヘーゲルは、この名前を呼びかける行為のうちに、宮廷貴族と君主との関係そのものを支える力を見ている。もしこの言語行為がなければ、宮廷貴族も君主も、そのようなものとして「通用する(gelten)」ことはないのである。ところで「へつらいの言葉」は、宮廷貴族から君主への一方的な言葉であって、互いに交換しあえる相互性をもっていないことに注意しなければならない。「へつらいの言葉は、権力をその純化された普遍性へと高める」¹⁰⁾のであり、従って、発せられた言葉の公共性≡普遍性は、もっぱら君主の側のみ帰属することになる。君主はこうして、人々の間に伝播した名前の公共性を独占しており、従って「へつらいの言葉は又、個別性をその尖端にまで持ち挙げる」¹¹⁾のだとも言える。こうして発話主体は、他者に対して言葉を発することのうちに自分の支えを見出すのであるが、まさにその発せられた言葉において自分自身ではないという矛盾のうちに投げ込まれていることになる。

宮廷貴族が、「へつらいの言葉」において自己喪失に陥りながらも、宮廷貴族として現に通用しているのだとすれば、その言葉は、

建前としての妥当性をもっているのだと言えよう。建前としての言葉は、発話者の「この私」から乖離したものであっても、発話者がそれを己れの社会的支えとしているかぎり、発話者の「現実性」として現に妥当しているのである。ヘーゲルは又別の箇所で、「偽善 (Heuchelei)」についても論及しているが、この場合、言葉が「仮面 (Maske)」⁸⁾として利用されている。たとえそれが仮面であつても、言葉は、利己的な意識をあたかも普遍的なものにみせかけるのに現に役立っているのである。

従つて建前や仮面は、単にみせかけだけの幻想的なものなのではない。それらは社会的に「通用する」という仕方、ひとつの「現実性」を形造っているのである。我々は既に、言語が物象になる現象を垣間見たが、ここでは、言語が社会的な物象となつて立ち現われているのである。ヘーゲルは、「へつらいの言葉」のうちにこの事態を見ている。つまり、発話者の語の行為によつて形造られる現実性が、その言語行為から自立し、発話者に対して「疎遠な現実性 (eine fremde Wirklichkeit)」⁹⁾として対抗して現われてくるのである。確かに「へつらいの言葉」は、発話者を社会的に通用するものにするが、同時に、発話者はまさにそこにおいて自己喪失に陥つてもある。してみれば、ここでは、前章でみた「疎外」が、新たな内容をもつて問題になってきているのだと言わなければならない。つまり「疎外」は、個別的な自我が、それによつて普遍的なものになるのだが、まさにそこにおいて自我は、自己保持を得るのではなく、かえつて自己喪失に陥るといふ事態を示すことになる。

ヘーゲルによれば、「へつらいの言葉」だけでは言葉はいまだ一面的なのである。「へつらいの言葉」において発話主体が自己喪失を経験するのだとすれば、当然のことながら、建前と裏腹に本音の部分が顕在化してこよう。ヘーゲルはそれに「反抗の言葉」¹⁰⁾として新たに光をあて、へつらいながら反抗し、反抗しながらへつらう「分裂の言葉 (Sprache der Zerrissenheit)」¹¹⁾に重要な意義を見出すことになるのである。もはやここでは、これらの言葉を詳しく論じる余裕はないが、いづれにしても、言語が物象となつて語る主体から離れてゆくという言語の弁証法をヘーゲルが見事に描き出したということはできるであらうし、そして又、そのことは、語る主体の言語行為のもつ新たな意味を問ひ直すことにもなるはずなのである。

註

○引用文中の強調点は、全てヘーゲルのものである。

(1) この系譜に属する言語論は主に、『イェナ實在哲学 I』(一八〇三/〇四)、『*Jenenser Realphilosophie I*』(一八〇三/〇四)、『精神現象学』の「感覺的確信」、『哲学入門 (*Philosophische Prolegomena*)』と『哲学的学のエンツィクロペデー (*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaft*)』の「心理学」で論述されている。

(2) この系譜に属する言語論は主に、『イェナ實在哲学 II』(一八〇五/〇六) および『精神現象学』(一八〇七)の「Ⅵ・精神」において論述されている。

(3) この小論では、紙幅の都合などもあって、『論理学』や『美学』において論述される言語については論及することができなかった。

- (4) Hegel; *Philosophische Probedeutik*, Werke 4, Suhrkamp (以下 *Prop* と略記) S. 52.
- (5) Hegel; *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaft*, Werke 10, Suhrkamp (以下 *Enzy* と略記) S. 280.
- (6) *Prop*, S. 45.
- (7) *Enzy*, S. 280.
- (8) *Prop*, S. 52.
- (9) 『精神現象学』の「感覚的確信」において、感覚に与えられている具体的なものも、言葉として「今」とか「ここ」というように発語されると、「普遍的なもの」になることが論じられている。
- (10) ヘーゲルが言語のこのような機能を、『イェナ实在哲学』や『哲学入門』において、アダムが万物に名前をつけることによってそれらへの支配を確立したこととして説明しているのは興味深い。
- (11) *Enzy*, S. 278.
- (12) *Prop*, S. 52.
- (13) Hegel; *Phänomenologie des Geistes*, Werke 3, Suhrkamp (以下 *Phän* と略記) S. 376.
- (14) ヘーゲルはその理由を、自我が、「振舞い」とか「表情」においては「外形のうちに沈み込んで」おり、そして「そこから自分のうちにひっこむことができる」という点に求めている。
- (15) (16) *Phän*, S. 376.
- (17) 『精神現象学』における「疎外」の概念内容については、拙稿『ヘーゲルの〈疎外〉概念——〈外化〉との関連において』（『思索』第十一号 東北大学哲学研究会刊）を参照されたい。
- (18) *Phän*, S. 363.
- (19) *ibid* S. 376.
- (20) ヘーゲルは『イェナ实在哲学 I』において、「記憶の所産」としての言語とは別途に、「国民の言語 (*Sprache eines Volkes*)」について論じているが、ここに既に「言語を言語共同体に固有の言語体系全体からみる視点」が明確に現われている。
- (21) *Phän*, S. 377.
- (22) *ibid*, S. 478.
- (23) *ibid*, S. 377.
- (24) 言語のもつ循環構造については、T・ボダマーが次のように述べている。「言語は、まず第一に諸個人の社会性を可能にするが、他方ではしかし又、言語は既にいつも、このような社会性の表現である」(T. Bodamer; *Hegels Deutung der Sprache*, Felix Meiner, 1969, S. 93.)。
- (25) *Phän*, S. 235. (26) *ibid*, S. 378.
- (28) *ibid*, S. 486. 「仮面」としての言葉は、次の文献でも考察されている。Daniel, J. Cook; *Language in the Philosophy of Hegel*, Mouton 1973, P. 87.
- (29) *Phän*, S. 382. (30) *ibid*, S. 384. (31) *ibid*, S. 384.